

4 学年次生に対する卒業時のアンケート集計結果のまとめ

- アンケート実施日：令和4年12月21日
- 回収方法 Google フォームにて実施
- 学生数及び回収率：学生数96名中96名回答（回収率100%）

I. 看護学部のカリキュラムおよびシラバスの構成について

カリキュラム評価に関する項目で卒業生が“そう思う”と回答し評価の高かった項目は、「保健師選択コースの教育内容について満足している（受講者のみ）」（80.0%）、「実習の施設は充実している」（75.0%）であった。一方で、“あまりそう思わない”“そう思わない”といった低い評価の回答が多かった項目は、「国際的保健・医療活動に目を向ける教育内容について満足している」（32.3%）、「他学部との合同科目（IPE）の教育内容について満足している」（22.9%）、「学生の個々の特色を伸ばす教育が提供されている」（25.0%）であった。

II. 看護学部のディプロマ・ポリシー（学位授与方針）の達成状況について

ディプロマ・ポリシーの達成状況は、例年肯定的評価がされているが、学生の自己評価と就職後の評価に乖離があり、正しく自己評価されていない可能性が考えられた。そこで、今年度は“そう思う～そう思わない”の選択から“4点（達成できた）～1点（達成できていない）”で評価するように変更した。昨年、一昨年は、最高評価の選択が40%を超える項目が9項目中8項目あったが、今回は1項目のみであった。すべての項目で平均3.00以上の評価がされていたが、そのなかで「看護専門職者として学習に主体的に取り組むことができる」の達成度が最も高く、「看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる」が最も低かった。これは、昨年度も同様の結果であった。

III. 看護学部での学生生活のサポートについて

サポートのなかで学生の評価の高かった項目（“そう思う”と回答した者が多かった項目）は、「図書館の学習環境は整っていた」（60.4%）、「医心館の学習環境は整っていた」（62.5%）であった。評価の低かった項目（“そう思わない”と回答した者が多かった項目）は、「e-ポートフォリオ（Mahara）は活用できた」（27.1%）、「国家試験対策は役立った」（16.7%）、「SNS講習会は役立った」（10.4%）であった。

IV. 看護学部での学生生活の満足度について

学生生活の満足度の平均値は74.8%であり、昨年（73.6%）と同様の結果であった。満足度の高い理由には、友人・教員との関係、学びの充実、学習環境などが挙げられた。満足度の低い理由には、設備や学習環境に関すること、コロナ禍の影響、国家試験対策に関することなどが挙げられた。

V. 看護学部でのカリキュラム、シラバスの構成、学生生活のサポートに対する意見・要望 (自由記載)

記載内容には、「カリキュラム」、「講義・試験」、「卒業研究」、「実習」、「国家試験対策」、「学習環境・設備」に関することが挙げられた。

<まとめ>

今年度は、看護総合の日程に合わせてアンケートを行ったため、すべての学生からアンケートを回収することができ、より多くの学生の意見を聞くことができた。

カリキュラムおよびシラバスの構成については、「国際的保健・医療活動に目を向ける教育内容について満足している」の評価が低かった。学生生活の大半がコロナ禍であったこともあり、国際交流の機会が限られてしまったこともあるが、国際看護に関する項目は例年低い評価となっている。新カリキュラムでは、国際的保健・医療活動に目を向ける科目が増えていくので、今後どう評価が変化するか見守る必要があるものの、国際看護学等の科目に限らず、各科目においても国外の保健・医療活動に目を向けた内容が必要であると考えられた。

ディプロマ・ポリシーの達成状況について、「看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる」の評価が低かったが、この内容については、卒業アンケートや就職先に対する調査でも同様の結果が示されている。教養ゼミナールや卒業研究などを通じて、学生の科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的な思考の強化に繋げていくことが必要である。一方、自由記載欄からみると、学生自身の卒業研究に対する意欲の薄さや意義の認識の無さなどが垣間みられているため、教養ゼミナールや卒業研究の意義なども学生に訴えかけていくべきである。また、カリキュラムおよびシラバスの構成についてのアンケートで、「学生の個々の特色を伸ばす教育が提供されている」が低い評価であった。教養ゼミナールや卒業研究などのゼミ形式の授業は、少人数であるため個々の学生の特色を捉えやすい。そのため、少人数のグループで展開される授業や実習において、個性を伸ばす教育の工夫が必要であると考えられた。一方で、ゼミ形式のみならず、その他の講義でも個々の特色を伸ばす方法を模索するために、来年度以降の学生へのアンケートなどで個々の特色を伸ばす方法に関する項目を追加するなどして、詳細を検討していく。

学生生活の満足度の平均は、74.8%であり昨年度と比べると変化はないが、一昨年(81.6%)、一昨昨年(86.6%)が80%を超えていたことを考えると満足度は低下している。満足度の理由にコロナに関する内容が挙げられていたことから、コロナ禍で様々な学生生活が制限されたことが影響していると考えられる。IV、Vの自由記述では、教員の対応に関すること、学習環境に関する事など、同じ内容でもプラスに捉えている学生とマイナスに捉えている学生がいた。実習指導の際に、教員によって学生への対応が異なることや、それによる学習成果への影響を懸念する意見が見られ、領域内ならびに学内での指導の統一や学修状況の共有など、より連携を図っていくこと、が必要と考えられた。また、大学に対しての評価では、例年同様、大半が交友関係、サークル活動が高い評価であったが、一方で、学びに対する意欲や学びの意義などを学生自身が認識することも重要であることも垣間見

られたことから、その意欲や意義の認識を入学前から在学中そして卒業後も持ち続けられるような方策，ならびに，大学としての存在意義を学生ともども見つめ直す時期に来ているのではないかと考えられる。

本調査の結果から考えられる今後の課題は，以下の通りである。

1. 国際的保健・医療活動に関する教育内容を充実させるため，各科目においても国外の医療・看護・保健福祉に目を向けていく。
2. 教養ゼミナールや卒業研究などを通じて，学生の科学的，明晰かつ批判的・発展的・論理的な思考の強化に繋げる。
3. 個々の学生の特色を伸ばす教育に配慮できるように，今後その方法を模索していく。
4. 学生の学びに対する意欲，学びの意識や大学の存在意義を見つめ直す。